

紹 介

K・ブラッシュケ著

寺尾誠訳

『ルター時代のザクセン』

——宗教改革の社会・
経済・文化史——

原著は K. Blaschke, Sachsen im Zeitalter der Reformation, Gütersloh 1970 である。宗教改革をテーマとする数多い啓蒙的な文献のなかで、本書は従来の著作にはみられないいくつかの特筆すべき性格を備えている。

まず、本書は邦文書籍としては、未だ貴重な宗教改革の地域史文献である。専門的な個別研究論文は別として、これまで出版されてきた宗教改革に関する著作は、なべて全欧史、各国史の枠に立つ政治史、あるいはルターをはじめとする宗教改革者の人物史に限定されていた。そのような文献をひとつあたり渉猟した読者が、次に求めるのは、いま一步、詳細な記述を含んだ地域史の著述であろう。特に、宗教改革の発祥地、

中心地であるザクセン選挙侯領への関心は、

精緻を極める諸ルター伝の記述から、ルターが舞台とした社会的背景の多彩な知識を得たときに、必然的に高まってくるはずである。ザクセン地方史研究の第一人者ブラッシュケが、歴史に知的興味を抱くザクセンの読者層に向けて、彼らの郷土が宗教改革という全ヨーロッパ的な事件に果たした役割を明らかにするという意向のもとに発表した論文の双書化である本書は、我が国の読者にも、その知識欲を満たしてくれる恰好のテキストとなるであろう。ただ、その刊行の事情は、我が国の読者にはいくらかの不都合をもたらすことになる。ブラッシュケは対象地域を、十六世紀に宗教改革を指導的に担ったザクセン選挙侯領をその一部分に含んでいるにすぎない近代以降の概念としてのザクセン地方に求めている。その結果、叙述における地域の配分が、各地域が宗教改革に果たした役割の比重に必ずしも合致しない場合が生じる。選挙侯領ははずれるライプツィヒ、ドレスデンに多くの紙数がさかれている一方、ルターと選挙侯の主要な居住地であったヴィッテンベルクに関する情報がいささかもたらないのは、その一例である。

の一例である。

第二に、本書は、邦題に付せられた「宗教改革の社会・経済・文化史」という副題が示しているように、宗教改革の進展を測る諸事件の編年的な記述を一切、省略して、宗教改革時代の諸社会相をスタティックに概観することを目的としている。宗教改革に当時の社会、経済的な諸関係の新しい変化が大きな影響を与えたことは、多くの文献が基礎的知識として強調するところであるが、いざ、実証的な内容となると、適切な例証を添えた著述は意外に少なかった。ブラッシュケは、領邦と国家、経済、社会、村落と農民層、都市制度と市民層、芸術の養成、教育と人文主義、教会と宗教的運動、という章構成のなかで、学術的な地域史研究の成果に基づく事例と数字を用いて、多様な視角から宗教改革の歴史的背景のデイトールを描きだしてくれる。その内容は、十全とはいえずとも、一般読者の知的関心をひとまず満足させてくれるであろうし、また、専門研究者にもその研究へのヒントを与えてくれることがありそうである。例示するならば、訳者の指摘にもあるように、都市と農村との経済的抗争の原因として最

も頻度の高かったのは、ビール醸造に關する利害であつたという実証は、十六世紀以降の都市と農村の關係をテーマとする研究者にとって興味深い。

本書の特色となる第三の要因は、ブラシユケの史観である。東ドイツの史家である彼には、マルクス主義に立つ史観が要求されているであらうにもかかわらず、本書におけるその表現は極めて原則的、かつ希薄でしかない。周知のように、宗教改革時代を特徴づけるマルクス主義史観に基く基本概念は、「初期資本主義」、また「初期市民革命」であり、東ドイツの学界では、それらはシュタインメッツのいわゆる「初期市民革命のテーゼ」に示されるように、今日では相当程度に厳密に定義されているはずである。たしかに、ブラシユケは、「初期資本主義」なる概念を本書のライトモチーフとして用いているが、叙述の詳細はすべて、実証的に構成される論理だけに基いて書き進められている。彼の用いる「初期資本主義」は、資本と労働の分化が原則的に認められるという程度の意味を越えるものではなく、また、その用語は宗教改革時代の社会全般の性格を大局的に表現する場合

にのみ使用されているように思われる。このような用法は、もちろん、ブラシユケひとりにとどまらず、今日のマルクス主義史家のなかに明確な潮流として認められる動勢である。そして、その現象は、農民戦争と宗教改革の研究をめぐる東西世界の史観の長い対立的な相互作用から派生した、マルクス主義史学の今日的な一面の表現と考えることができる。なお、訳者の解題を借りて付言すれば、ブラシユケの東ドイツにおける史家としての境遇はいくらか微妙であるという。

以上に紹介したように、本書が備えている三つの特色は、いずれも宗教改革史研究が直面している現況と密接な結びつきをもっている。本書はそのような意味で、興味深い啓蒙書である。

(四六版 三二三頁 一九八一年七月
ヨルダン社 二八〇〇円)
(永田諒一 岡山大学講師)

アイザイア・バーリン著
小池 銈訳

『ヴィーコとヘルダー』

——理念の歴史：二つの試論——

本書は、Sir Isaiah Berlin, *Vico and Herder: Two Studies in the History of Ideas*, 1976 の邦訳であるが、著者バーリンについては、いくつかの邦訳も刊行され、今更紹介を加える必要もないであらう。ただ本書に關して一言すれば、ここで取り扱われるヴィーコとヘルダーは、彼の十指に余る思想家研究の一部であり、その中でも特に優れた一部である。ここで優れたという評価を下す理由は、単に二人の思想家の歴大かつ晦渋な著作を手際良くまとめ上げた事に依るものでも、問題点を浮彫にする行論の鮮かさに依るものでもない。むしろ本書の特色は、バーリンの叙述の下敷となり、二人の思想家に対する鋭い切り込みを可能にしている彼の基本的な眼にこそ求められるべきである。序説においてバーリンは次のように述べている。

「観念というものは真空の中では生れない